

謠曲の吞節と國語の鼻母音

高田 富三郎

一
現在、邊陲地方に於ける發音現象の一つとして鼻母音が指摘されてゐるが、この現象は室町末期頃には中央の口語に於ても表れてゐたらうといふ説に對する一參考資料として、謠曲の吞節を取上げて見る。

この調査は現行觀世流謠曲を以てした。

二

謠の節廻シの中の特異なものに吞節がある。或は單に吞ミとも云ひ、その記號に **ㄋ** の形を用ゐてゐる。この節の附いてゐる字はその生み字（開音節の母音の部分

をいふ）を中途から唇を閉ちて鼻へ抜いてしまふものである。廻シ節の變形とも見られるもので、廻シ節の生み字を下げる所を鼻音に代へて下げれば丁度同じくなる。

必ず唇を閉ちるから、普通唇内音^mであるが、同時に舌

が上顎に附く事も少くなく、この場合は唇内音ⁿとなる。

従つて吞節の附いてゐる字の次へア行音・ヤ行音がくる時、連聲でナ行音・ナ行拗音になる事もある。又、カ行音が次へ来る時は喉内音^oともなる。その長さは大體一字分の長さである。普通、唇を閉ちた直後音階を一音半（一音は西洋音樂長音階の下とレとの音程）乃至二音半下げた次の假名から舊態に復する。もし次の假名以下が二音半乃至三音半下げた時は、その音階迄下げて次の假名に移る。異例としては、全く音の上下がなく、たゞ假名の間に鼻音が挟まれてゐると聞かれる丈のものもある。「岡田川」にある念佛の如きこれで、「南無阿彌陀佛」を十三遍も繰返してゐるが、凡て「陀」に吞ミが附いてをり、*……tanbu*となる。稀に吞む時に音が上る事があり、殊に剛吟となるとそれが通則で、大體吞ミの附いて

ある假名の生み字を二音程上げて鼻音に代へ、すぐ舊音階に下けて次の假名に移るのである。

この記號に用ゐる **ろ** の形は各流に共通であるが、その起原に就いては明白にし難い。平曲にも大廻シといふ **ろ** なる節があるが、鼻音的なものではない様に考へられる。吞ミの頭字ノの古體字がこれに似てをり、建長四年移點の白氏文集、大矢透博士「假名遣及假名字體沿革史料所輯」に見える形など殆ど同じ。然し吞節の形を古い謄本に溯つて行くと漸次簡略になつて行き、慶長に板になつたといふ「光悅本」になると殆ど **ル** となつてゐる。するとこの形は承暦三年抄の奥書ありその後三度許り影寫された「金光明最勝王經音義」(東大國語研究室藏)に「仙セ」等とある韻を表してゐる字と非常に似てくる。この字の説明に「件 **ル** 音ムニハ異也可知也」とあり、ここに記載されてゐる例が全部 **ル** 韻である所から見ると、この字は **ル** の音價を持つたものである。然もこの形は撥音として外にも廣く用ゐられてをるのであるから、吞ミの記號も恐らく、かういふものから來たものであらう。

三

總じて觀世流は、寶生流や下懸諸流に比較すると、吞節の用ゐられてゐる數が少いと言はれてゐる。下懸諸流は殊に多く、上懸でも、寶生で吞節になつてゐるものが、觀世では廻シ節とか直節とかになつてゐるものが可成り多いとの事である。各流に就いてその異同を調べると、流儀の特色を知る上に興味ある問題を提供するであらうし、一層吞節の本質を明める上に役立つ事と考へるが、今の所その中の一流さへ見ればその性質は大方知れようと考へ、觀世流一流をとつて、内、外、別、番外合せて二百九番及び蘭曲(古作の曲舞集)に就いて見る事にした。之に使用した本は大正十三年檢常之助版「大正旅の友」(天地人上下六冊)である。

今吞節の附いてゐる語を、語頭又は語中の假名に附いてゐる場合と、語尾の假名に附いてゐる場合とに分けて擧げて見よう。この場合の語とは大體一品詞を指す。助詞などの一字一語のものに附いたのは語尾に附いた事とする。

第一類として、語頭又は語中の假名に附いてゐる場合を見る。

(一) 漢字二字以上が結合して出來た漢語の中に用ゐられてゐる事がある。この場合吞節の次に來る假名はマ行音ダ行音バ行音に限られてゐる。但し例は少い。(即糊の都合上、吞節の記號を、を以て示す。

惡魔(高砂) 毘音摩磨(百萬) 三界無安(重僧)

東女(山姥) 南無阿彌陀佛(大原御幸)

彌勒佛(平蕃) 上米菩提(東北) 南無阿彌陀佛(鶴田川)

南無阿彌陀佛(百萬・隅田川)

諸行無常(關寺小町) 諸行無常(三井寺) 地藏堂

(龍野)

「南無阿彌陀佛」に吞節の附いた例は「大原御幸」の一例を除いては「百萬」「隅田川」共に狂女と念佛衆とが聲高に繰り返し、稱へる所で、シテと地との掛合ひで語はれてゐる。

最後の三例は、二百番中吞ミが長音に附いた全部の例

で、その内二例まで短音化してゐる。
(二) 國語の方になると、品詞別に見ると先づ名詞の中に表れてゐる場合、次に來る假名は有聲子音を頭音に持つてゐるもの丈である。即ちナ・マ・ラ・ガ・ザ・ダ・バ行音が次に來る。

來し方より、絶えせぬものは戀といへる(曲者(花月) 御法の船の水脚(東岸居士) げにも心は、消釋が佛果を得し

こそありがたけれ(消釋) 鴛舟にともす辨火の(鴛鴦) 蚤の小舟に乗り移り(通監) おもなの舞の。有様や女(定家) あじきなや(消釋)

馴れてつばいは山伏(大江山) 山船色をさうつしつゝ(奥

服) 八洲の國(淡路) 荒海の陰子(雷宅) 三保の入り海田子の浦(盛久) 燃え焦れ煙の内の苦みも(國隆殿院) 亂

るゝは、柳の髪か春雨の(籠太鼓) 東雲の空も(隅田川) これぞ野守りの鏡なる(關横山)

翠長紅閨に枕を並べ(定家) 定家葛に身を堕ちられて(定家) 波風の荒磯船住み捨て(鶴田川)

春日の祭の勅便として(杜若) 陸には波の楢(八幡) 残ん

の雪の淡香橋(高砂) 空澄み渡る神かくら(老松) 足
 びきの地山めぐり(山姥) 夕顔の。宿の破れ車(葉上)
 玉藻刈るなる岸陰の(元高砂) 山の常陰も(錦木) 有明頃
 かいつしかに(龍蝦)

松風の音となり(都那)

左の袖を展げ(鶴) 弓に隔てはよもあらじ(花月) なき跡

の涙こそ(百萬) 車の轡は足引の(車僧) さすや桂の枝々

に(融) 波路遙かに行く舟の(百樂天) 弓張月の。いるに

まかせて(鶴) 言よせ妻の空頼め(戀重荷) 軒の玉水音す

ごく(羅生門) 宿も定めぬ假寝かな(西園下) 匿戸皇子

と申すも(龍上宮太子)

なく驚の前葉の竹(龍太鼓) 形はさながら山彦の(鐘旭)

關の人々肝を消し(安宅) タベの空の一霞(雲林院)

カ・ヤ行音に後行された例も總か一例づゝ乍ら見える。

雲屏百敷や(卒都婆小町)

見えてぞ向ふ鏡山(志賀)

代名詞の中に表はれてゐる場合も、次に來る假名は

諸曲の存節と國語の異母音

ラ行音とガ行音のみである。

われも雲岡に立ち添ひて(花籃)

我が子戀しや我が子賜べなう南無釋迦牟尼佛と(百萬) わ

が木坊にぞ歸りける(遊成寺)

(二) 動詞の語中に表れてゐる場合。次に來る假名はナ・

マ・ラ・ダ・バ行音である。

琴書書巻を嗜む身(善知鳥) 東路の、佐野の船橋。取り放

し。親し。さくれば。妹に逢はぬかも(船橋) 柳條を頼ぬ

(遊行柳)

住まで世に經る土車(土車) 鞘つまりたる(大佛供養) 玉

體をなやまして(鶴) 彌陀頼む(百萬) 心安く思ふべし

(盛久)

忍びくくに。もとむれば(鐘旭)

もとの下界へ。追つ下す(餘利)

佛の戒め給ふ殺生戒をば破るまじ(花月) さも思し召され

ば(鞍馬天狗)

複合動詞にも表れてゐるが、ナ・マ行音の前である。

とどろくと踏み鳴し(橋擲懸) 又むら雲に。飛び乗り

(小鍛冶)

美人の中にとりては何れか劣り儼らん(蘭美人摘) 里々をめぐりめぐりて(花月)

〔四〕

存在詞「なり」にも「な」の箇「り」の前に吞節が表れてゐる事がある。

とがめ給ふぞ、愚かなる(放下僧) 華やかなりける。いでたちかな(鞍馬天狗) 夕暮は、一方ならぬ。思ひかな(通小町) 籠れる鬼の、住家なり(安達原) 私語なれども

(楊貴妃)

月人男の舞なれば(柳都) 春なれや(高砂)

〔五〕 副詞では、次にマ・ガ・ザ・タ・バ行音をとつて表れてゐる。

さしもの辨慶合せ兼ねて(橋辨慶) 時しも頃は如月の(安宅)

秋の夜すがら月澄む(三井寺) 語る夜もすがら(雲林院) はつたと打つ手にむぎと組んで(大江山)

手にもたまらで程もなくただ徒に消えぬれば(花座) 未だ解脫の種を植えず(江口) しづしづと太刀ぬき放つて(橋)

辨慶 いかで佛果に到るべき(遊行柳) 日もすでに傾むきぬ(富士太鼓) 遙々來ぬる唐衣(杜若) 塵と身命を惜まず(野守)

ア行音が次に來てゐる例が一例丈見える。なほ行く末は白眞号(前東國下)

〔六〕 時の助動詞「けり」の「け」に吞ミがついてゐる事がある。うとうと呼ばれて手はやすかたと答へけりさてぞとられやすかた(善知鳥)

〔七〕 助詞の語中にも表れてゐる。「かな」「とも」「ども」「まで」の第一音節に附いてゐる。ほととぎす。名をも雲居に。あぐるかなと。仰せられければ(鶴)

繪にかくとも。筆にも及びがたし(大原節堂) 泣けども聲が。出でばこそ(自然居士)

今まではさしもげに。怒をなしつる鬼女なるが(安達原)

語頭・語中の假名が吞節をとつてゐる例は大體以上の如きものである。この吞節の表れてゐる状態を見るに、こ

れの附いてゐる假名は雑多である。たゞ次の假名、即ち直ぐに吞節を享ける假名に共通點を見出す。その頭音が有聲子音である事である。稀にア行・カ行・ヤ行の音である事もあるが、それは僅か一例づゝを見出すに過ぎず、他は凡てナ行音・マ行音・ラ行音又はカ・サ・タ・ハ行濁音である。吞節の數を調べて見ると、バ行音の前が最も多く三十六ヶ、ダ行音の前にも三十五ヶ、あとはマ行音の前が二十六ヶ、ナ行音の前が二十ヶ、ガ行音の前に十五ヶ、ラ行音の前に十二ヶ、ザ行音の前に三ヶ、ア行・カ行・ヤ行音の前に夫々一ヶとなつてゐる。勿論、これは吞節丈の計算であつて、同じ音の前でも吞節の交れてゐない場合は數多くある譯である。

第二類。吞節が語尾に來た場合、即ち他の語とのつながりに於て表れてゐる場合を見る。發音の末尾に來て吞ミの儘で發音を休止する場合は後述する。

〔八〕 名詞の語尾に表はれてゐる場合。

(イ) 次に助詞をとつてゐる場合は「の」「に」「も」との繋りに於てのみ見られる。

「の」

コソ。夜半にもなりたるや(種大鼓) 賑ふ民のかまど
の隅(瀬西國下) 荆棘の如く亂して(百萬) 水増ぶ。釣瓶
の繩の釣瓶の繩の。繰りかへし(繪櫃) 三吉野の。川渡籠
つ波の(細川)

「に」

往事渺茫としてすべて夢に似たり(松山鏡) 白波に。ざつ
ざつと。うち入れて(賴政) 海越しに。見えてぞ向ふ(鏡山
(志賀)

「も」

雲に起き臥す時もあり(花月) 汐潮は波も高砂や尾上の松
の夕嵐(瀬西國下) 生死長夜の長き夢。路かすべき人もな
し(安宅) 月の横川も見えたりや(兼平)

(ロ) 下に助詞をとつてゐる場合は「なく」の一例しか見えない。

牡鹿なく。この山里と詠めける(小菅)

〔ハ〕 名詞が下に來る場合は必しも有聲子音とは限らな

い。

その時水主相スイシユウカサトウ取共。順風に帆を揚げて(松浦物狂)磯の

波ナミ松風マツカゼばかりの音さみしくぞなりにける(八鶴) 舞臺

の笛和琴フエトコ。聲を上げて叫べども(土車)

(二) そこが句末である場合も同様である。

娑婆示現觀世音。三世利益同一體サハシケンカニオン有難ユナシや我等がための悲

願ネガなり(誓願寺)

〔九〕 代名詞の語尾に表れてゐるのが一例見えるが、それは助詞「まで」が次に來た場合である。

よしそれまでぞ。さゝらも八撥をも。ちちすてゝ狂はし

(土車)

〔十〕 動詞の語尾に表はれてゐる場合。

(イ) 助動詞が次に來る場合。それには「ぬ」「めり」「ま

じ」「る」「らむ」「べし」がある。

「ぬ」

望み足りぬと驗者達はわが本坊へぞ歸りける(道成寺)

「めり」

阿波沖舟の漕ぎ來るは。雨アメごさめれ今一返も。汐波めや人

★(絃上)

「まじ」

龍門原上の土に屍をば曝すとも。惜しがるまじき命かな

(七騎落)

「る」

さのみ重荷は。持たればこそ(戀重荷) 間違に結へるませ

がきや(大原御幸)

「らむ」

波の花こそ。間なく寄すらめと詠みたれば(櫻川)

「べし」

雲と昇り煙と消えて後その跡を留むべくもなし(東屋居士)

極楽の内ならばこそ悪しからめ。そとは何かは。苦しがる

べき(卒都婆小町)

(ロ) 助詞が次に來る場合。「ながら」「ども」「ば」がある。

「ながら」

又は愛き身の恥をも。馴すにては候へどもさりながら(攝待)

「ども」
行けども悲しや行きやらぬ心」

「ば」

葦が下によしさらば。今宵は片敷きの(小聲) 登れば玉の階の(成隙意) 親のなけれは我が爲に。心をとむる手もなし(花月) 廻れば野邊になるみ瀉(盛久)

(ハ) 名詞へ續いてゐる場合。その語頭音は必しも有聲字音をとつてゐると限らない。

牡鹿鳴くなる夕まぐれ(項羽) 枝を連る御契(舟遊影) 月に啼く氣色にて(清經) 泣く涙 雨と降らん渡川(船橋) 浮きてたよよふ船人と(彌次)

(ニ) その動詞が句末である場合も同様である。

御影あらたに見え給ふかたしけなの御事や(三輪) 夜の空も近づく六つの鼓打たりよ(龍太鼓) 地獄の苦みは無量なり(佛鬼の) 苦しむも無邊なり(聖白)

(一) 形容詞の語尾に表れてゐる例は一例見えるが、助詞「ば」との繋りに於てある。

二無の願望もし空しくば。大聖の誓約豈虚妄にあらずや(盛久)

請曲の吞節と國語の鼻母音

(三) 助動詞の語尾に表れてゐる場合。

(イ) 更に助動詞、ぬ、「けり」「べし」をとつてゐる。

「ぬ」

心言葉も及ばれぬ(富士太鼓)

「けり」

首かき切つて。捨て、けり(實盛) 箱蓋りしてけりや霜曇りにて失せにけり(道明寺)

「べし」

鐘鼓音遠りして。鳥驚かずとも云ひつべし(山姥)

(ロ) 助詞「ば」が次に來てゐる事がある。

一見卒都婆水腫三惡道。この文の如くば(善知鳥) 大雨しきりに降りしかば(老松)

(三) 副詞の語尾に表れてゐる場合。下に用言體言など來るが、その語頭音は有聲字音をもつとは限らない。

今もまた叫捨山とぞなりにける(頓捨) すみやかに入ると見えて(道亨) 既にこの日も入相の(夜討曾我) 靜かに

法施を參らせ(西美人擲) 水また水(山姥) 山また山(山姥)

〔四〕 助詞の場合。次に用言體言などが来てゐるが、その語頭音は雑多な音をとつてゐる。例を「の」に取つて見れば、

十念の間に(土車) 喜ひの餘りにや(唐船) 極樂のお菩薩の遊と(東岸居士) 鎌倉殿の御使(正徳) 時の移るをも(景清) 一の谷の合戦(忠徳) 山路の菊の酒(紅葉) 上るよ(おび)の祝詞を奉り(龍藏川) 終に醍醐の辻散りぬ(源氏供養) 一葉の菊なれや(清經) 耶耶の枕にふしにけり(都那) 三作の谷が着たりける(景清) 何事も一睡の夢(都那) いかによ界の龍神(絵上) 龍宮の内裏を。照すなり(九世)

「を」を見ると。

舊銘を埋む(項羽) 木の葉をかき集め(霜月) 行末を照し(弱法師) 深く頼みを秋が枝に(藤) 老いかよめる姿をば(橋桓)

この外「と」「に」「は」「より」「まで」「も」「ば」「ぞ」「か」「て」「や」等に吞節の附いてゐる例が多い。

以上、語の終りの假名に吞ミが附いてゐる例を分けて見ると、これに續く音が有聲子音に限られてゐる類と無

聲子音なども一緒にとつてゐる類とに分ける事が出来る様に考へる。前者は助詞助動詞の如き附屬辭が後行してゐる場合、後者は名詞助詞の如き獨立詞が後行してゐる場合である。前者の場合について見ると吞節の數は矢張りバ行音の前に表れてゐる事最も多く、ナ行・マ行音の前に表れてゐる場合が之に次ぐ。ラ行音の前にも三例程見え、ヅ行音の前には見られない。

第三類。最後に、發音の末尾の假名に吞節が附いてゐる場合、即ち吞ミの儘で發音を休止する場合の例がある故、一應擧げて見る。この例は非常に多く、吞節の過半數が發音の末尾に来てゐるものである。然しこれは吞節に限つた事ではない。謡ふ場合、四拍子と合せるのに、字餘字不足が澤山出来るから、大抵發音の末尾を伸縮して合せるところに色々な飾抜ひを嵌め込め餘地を生ずる譯である。然しこの場合の例は、この論文の目的に直接の關係はない故簡略に擧げる。

〔六〕 漢字音に附いてゐる事がある。

妄語綺語。惡口兩舌は。口にて作る罪なり(東岸居士) シテ

〔六〕「微妙淨法身。異稱三十二。以八十餘好(海土)名詞の語尾へ附いてゐる場合」

老いたるも穢る世の習(オホク)(夜討宵獲) 機織松織さりぎりす

(錦木) 逃れ難しやわが命(イノチ)(海士) かざして多き(オホ)衣(ヒヤウ)

(百萬) その長さ三丈餘(石橋) 報はでそれぞ人心(ヒヤウ)

(重荷) 朝顔の露の帳(カ)源氏供養 この土を返して今一度

この世の姿を母に見させ給へ(鶯田用) あはれ昔の戀

しさを。今も娘女の船遊(江口)

〔七〕動詞語尾に附いてゐる場合

世にうれしげに見え給(宗法) 子賀の腰に身を焦す(善

知鳥) 神ならぬ身をうらみかこも(富士太鼓) 御慮かと

伏し拜み(京紙洗小町) 野にも山にも清を流す(宿願)

副詞では「みな」「すぐすと」「夜もすがら」「等、助動

詞では「たり」「けり」「き」「べし」等の例が多い助詞で

は「の」の例最も多く、「も」「ば」等その他も多い。この

うち「や」へ附いた例には普通の

頼みはあひに近江路(田村)

戀しき人に近江の。海山も勝たる(兼行)

の如きものゝ外に、

あら恨めし(源土)

眞如の月の夜汐に浮びつゝこれまで来れり。有難(ヤ)

(鶴)

と一具ヤを呑んだ後再びヤと發音する様な例もある。

謡曲の中の吞節の例は、精粗當を得てないが大體以上

擧げた通りである、總数は約八五〇個、そのうち第一類

の語頭語中の假名に附いた例は一五〇個で、總数の二割

に満たない。多いのは語尾の假名に附いた例で、殊に發

音の末尾に附いた例が大部分である。品詞別にすれば、

助詞に附いた例が殆ど半數を占めてゐる。然しこれは謡

曲物としては當然で、語中に節を挿入する事はそこで意

味を切る結果になり易い故、多くは眞直に讀む。流

布本花傳書にも「露(つゆ)の字を云ひて詰め開きをば、ては

はの字にて彩るべし。節は大略てにはにあるものなり」と

四

吞節はその起因を謡曲以前の音曲類、平曲、家前等に

求めるべきであらう。然し今残つてゐる平曲の節附を見ても鼻音を意味してゐると考へられるものは見當らないし、謡曲以後の類にいたつても餘り聞かない。たゞ、少數乍ら時に文字の前後に鼻音をおいて發音したらうとは考へられる。聲明を見ると「四座講式」(帝國圖書館藏)の中に「得^{コト}菩提^{ボツヂ}之珠^{シユ}(涅槃講式)」「二月^ニ(舍利講式)」「生死^{シヨウジ}谷海^{コウカイ}無念^{ムネン}朝^{アサ}徑^{キョウ}涅槃^{ネはん}皮^ヒ岸^{カシ}無生^{ムシヨウ}岸^{カシ}(舍利講式)」とあるのは、傍調の通り鼻音を入れて讀むのであらう。同様な例は平曲にもあり、萩野檢校の「平家正節」(帝國圖書館藏)に「四月」「十二月」「しんばし捺えて」等書いてある所ある。

謡曲以後のものゝ例としてはよく狂言の小説に「あんの山からこんの山へ」とか「傘をさすならば春日やんま」とか「はんま千鳥の友呼ぶ聲は」など、ナ・マ行音の前に鼻音を入れる。義太夫でも時と發音の末尾を「走り行くー」の如く、唇を閉じた鼻音で結ぶ事があるし、昭和十年七月の明治座で「帯屋の段」に津太夫が「皆様の前で高んらかに讀んで」など語つてゐた。

然し未だ謡曲に於る程豊富且自在に鼻音を驅使してゐるものゝあるのを知らない。この豊富な鼻音群は何を意味してゐるのだらうか。その中に規則的なものを發見しようとするならば、たゞそれが語頭又は語中の假名に附いてゐる場合必ず次にナ・マ行音カラ行音かカ・サ・タ・ハ行濁音を要求してゐる事、然も語尾の假名に附いてゐる場合と雖も、次に來る語との繋りが密接な場合、即ち語では常に一樣に發音されるが話し言葉として考へる時必ず一續きに發音されてそこに音の區切りをおいて發音される事はあるまいと考へられる獨立詞と附屬辭との結合の場合にも、次の語の頭音には常にナ・マ行音・ラ行音・濁音の何れかを要求してゐる事を知る。故にこの場合文について云ふと、何か口語と關係がありはしまいか、恐らくはかういふ條件を生み出さしめる様なものが實際口語にあつたのではないか、といふ風に考へられる。

謡曲と同じ様によく鼻音的なものを要求してゐる發音現象を探す時に見當るのは、現在東北方言に於て見られる鼻母音現象である。濁音の前の母音が鼻腔の共鳴を伴

ふもので、詳しくいへば、右聲破裂音を發音するのに、前の母音を口腔の一部で閉鎖する時に、聲を續ける爲鼻への道を閉き、口腔の閉鎖を破る時に至つて鼻の道を塞ぐ現象、早く發音される場合には口腔の閉鎖前に鼻への通路が開かれる事多いから、前の母音が鼻音化して聞えるが、ゆつくり發音して見ると母音と次の濁音との間に

[n]性の鼻音が介在してゐると聞かれる現象である。

この現象は、土佐方言にも見られる。その範圍は方言音・ダ行音の前に規則的に表れ、ナ行音・マ行音の母音に限つてザ行音・バ行音の前でも鼻母音化する(佐藤仙一郎氏「土佐方言の音韻」方言四ノ二)が、東北方言では廣く、ガ行音・ザ行音・ダ行音・バ行音で他地方でも濁音に發音される類の前では常に鼻母音化する。更に盛岡市附近ではナ行音・マ行音の場合にもその前の母音が鼻腔の共鳴を伴つてゐるが(松本之盛氏「紫波方言音韻稿」國語教育十七ノ三、橋正一氏「鼻母音についての疑」方言と土俗四ノ二)、筆者の経験では仙臺も同様である。恐らくもつと廣く行はれてゐるだらう。

即ちその發音過程のみならず鼻母音を伴ふ條件迄、語中に吞節をとつてゐる場合のそれと著く似てゐる事を知らる。

以前、例外として、語中でア・カ・ヤ行音の前にも吞節が表れてゐた事を報告してをいたが、このうち

「雲居百敷（ウネイヒヤクシキ）」は現在の他流の謠本を見ると、實生、喜多共に「雲居百敷（ウネイヒヤクシキ）や」と濁音に讀ませてゐる。この讀み

方については、俳人大井貞恕の著になり門弟忍鏗が明和九年に増補出版した謠曲百一首の註釋書「謠曲拾葉抄」にこの所の説明に

後水尾院詠歌大概抄に云も、しきのきの宇遣邊院は濁稱名院は滑云々總して遣邊院は濁かち也稱名院は滑なる事おほしと也云々(國風院大學國文註釋全集)

とある。但し、細川幽齋の詠歌大概抄二卷本、三卷本及び東大圖書館藏の内容の多少相違ある著者判年共にない同標題の二卷本にはこの記事が見えない。後水尾院御註の同標題の本がある由、その方にあるのだらうか。又同じ「鏡山（カガミヤマ）」の例も貞享二年山木長兵衛板の觀世流百番集

横本全五冊によると、朱で廻シに訂正されてをり、實生流でも現在廻シにして讀つてゐる。即ち二つ共例外であるとはつきり斷言する事も出来ない様である。

然も、現在東北及び土佐の方言にしか見られない鼻母音現象も、室町時代末期頃には近畿その他の國々にもあつた様に考へられる。それは、室町末期に我國に在留した葡人ヨハン・ロドリゲスの日本語典（一六〇四—一八〇八年長崎版）に「或特別の音節を如何に發音すべきかの方法について」と題する章（同書一七七丁裏）の中の第三則として「Dz G の前の母音について」と標して

D Dz G の前のあらゆる母音は、常に、半分の *e*（葡萄牙語に於ける音化の符號である）があるもの、又は、*e* に幾分近い、鼻の中で作られる *sonante*（反語を表す演説上の閉子）の如く發音する。例、*malta, nido, nuda, nuda, nuda, nuda, nade, nido, naddu, zgnai, agaru, azagu, caca, canafala, fegaru*（橋本進吉先生「國語に於ける鼻母音」方言二一—二所引）

と、語中のカ行・タ行の濁音の前の母音が鼻母音化する

事を言つてゐるが、尙右の文に引續いて

この同じ規則は、主として *D* が重つて *D* に變じた場合に於て、*B* の前の母音人にも時にあてはまる。しかしこれは一般的ではない。例、*malta, sonafala*。（右論文所引）

とあつて、ハ行濁音の前でも鼻母音化する場合ある事を述べてゐる。土井忠生氏の「近古の國語（國語科專講）の「第二章音韻」の「鼻母音」の部に引く所によると、右文典を簡約にしたロドリゲス小文典（一六二〇年媽港學林刊）では、*D G* の外、*J Z* 即ちジャ行・ザ行音の前でも時に鼻母音となると書いてあるとの事である。その他、同じく宣教に來てゐた西班牙人コリヤドの日本語を寫したものには、*D G B* の前の母音には常にチルの符號を施してゐるといふ（土井氏同論文）。橋本先生はロドリゲス文典の記述からして、この様な鼻母音が室町末期に近畿その他の國々にあつた事を信じてよからうと述べられてゐるし、土井教授も之を認め、コリヤドの記述は當時の九州方言の鼻母音を云つてゐるのかも知れないと言はれてゐるが、大體疑ないものと思ふ。刊年は下るが大體こ

の時代の日本語を觀察記述したと考へられるものに朝鮮人康遇聖の著「捷解新語」がある。同書は康熙十五年（延寶四年一六七六年）の刊行に係るが、彼が朝鮮の役で俘虜として久しく日本に滞在してゐる間に習熟した日本語を記してゐるもので、會話體の口語文（恐らくは當時の中央の口語であらう）を平假名で稀に漢字を交へて書いて、ム字々々の傍に謄文で發音を書いてゐるものであるが、カ行音・タ行音のうち、現在濁音に發音され當時もさうだつたらうと思はれる字の前の字に當てた謄文には常に夫々の **(h)**、**(n)** の終聲がある。これは時にサ行濁音と考へられるもの、前にも附いてをり、稀にハ行濁音と考へられるもの、前にも **(m)** が附いてゐる事があつてゐる。鼻音の終聲をとつてゐるのは次に來る字の濁音である事を示してゐるとも考へられるが、その状態がロドリガスが示した鼻母音の表れる條件と殆ど一致してゐるのは偶合といふよりは矢張り同じく鼻母音を表してゐるものと想像したい。

五

諸曲の吞節と國語の鼻母音

即ち室町末期より江戸初期にかけて、近畿の口語に於ては大體ガ行音とダ行音との前に母音鼻音化の現象が存した事が認められるのであるが、諸曲に於る語中に吞節をとる場合の條件は口語の一層古い状態を暗示してゐるものと様である。但しこのうちナ行音・マ行音については、その前に鼻音をとる事は謠物として施律上の當然の要求とも考へられるし、多少疑問の餘地が存する。結局ガ行・サ行・ダ行・バ行音及びウ行音の前に吞節をとつてゐる事が口語との關係を考へしめる材料として残る。

以上論じたのは語中に吞節をとつてゐる場合に就てである。然しこの例は吞節全部の数から見ても約六分の一程で、吞節の本節を論ずるならこれ以外の大多數のもの、例に就いて調べるのが正當であらう。然し自分には未だその廣く使用されてゐる所以を知る事が出来ない。従つてこの研究も現在まで解明されてゐる口語の鼻母音現象と結びける事に止まつた。今後は更にその全體の性質について明白にして見たい。